

営業スキル向上勉強(#41)

2017年9月22日

書籍タイトル :IoT は日本企業への警告である

24時間「機械に監視される時代」のビジネス条件

今回この本を読んだ目的、きっかけ：

IoTにより、現在様々なモノが次々にインターネットにつながっている。

「えっ、こんなモノまで!?!」と思うモノもだ。

例えば、見守り機能を持った電気ポットなど…。

この先、そういった世界にも入っていかないと生き残れない時代になるだろう。

その時に、IoTが何か、その本質について知っていなければ話にならないので、ビジネスにどう利用すればいいかも合わせて学びたい。

概要：

今、日本は大きなチャンスを迎えている。その正体はIoT、しかし同時に最大のリスクでもある。

IoTとは「Internet of Things」の略で、日本語では「モノのインターネット」とも呼ばれる。社会のありとあらゆるものがネットにつながり、「知能」を駆使する時代が目前に迫っている。一般的には、様々なモノに繋がって膨大な情報がクラウド上に収集される点に関心が集まりがちだが、それはIoTの1つの側面に過ぎない。そうして集められたビッグデータをコンピュータが自動的に分析し、モノや人にフィードバックされて、生産性や正確性、経済的利益が向上する。この一連のプロセスにIoTの真価はある。

さらに、情報のインプットから、データ処理、アウトプットの各段階で技術進化が同時にそして大きく花開こうとしていることで、これまでになかった全く新しい事態が生み出される環境が整いつつある。

ネットを活用した新しい潮流のほとんどが、アメリカを中心とした海外からの発信であることだ。そのアメリカですら、IoTがもたらす変革の全貌はつかみきれていない。つまり、少なくとも現時点では、日本も大きな後れは取っていないのだ(2015年時点)。

さらに、あらゆる「モノ」をインターネットにつなげるIoTでは、モノづくりの力が必要とされる。ここにネットのサービスでは後塵を拝している日本のチャンスがある。

この本では、守りを固めることばかりに心を奪われ、窮屈な袋小路に迷い込んでいるように見える、今の日本へ送る著者からのエールだ。IoTを日本の製造業やソフトウェア産業の復活のチャンスとするためには、日本が変わる必要があるのだ。

参考にしたい点、気になる点

1. 「IoT が一気に花開くとき」

IoTは確実に世界を変えていく。とはいえ、その変化は少しずつだ。

今、スマートフォンを活用している人にとっては、もうスマートフォン無しの生活は考えにくいのではないだろうか。テクノロジーとアイデアが積み重なるうちに、社会に広く受け入れられた製品やサービスが暮らしにぴったりと収まって、世の中を変えていくのだ。IoTによる変化は庭に植えた種や苗が成長するように、気づかぬうちに茎や葉を伸ばし、時期が来れば大きく花開き、豊かな実を結ぶ。

今、世界ではIoTの果実が着々と成長している。

例えば、ドローン。「drone」はもともと雄のハチを意味する単語で、無人飛行体のこと。リモコンヘリコプター的一种だ。リモコンのヘリコプター自体はかなり前から存在し、世の中で広く活用するにはあまりにもマニアックな道具だったそう。

そんな状況を一変させたのがドローンだ。IoTの進歩がリモコンヘリコプターを一気に進化させ、実用化させたと言えるだろう。

次にAI。「AIなんて、まだ使い物にならない」と思い込んでいる人もいるだろう。もちろんAIの進歩は途上で、何もかも人間並みとはいかない。でも、すでにある段階までは技術的な課題をクリアしており、様々なことができるようになってきている。アップルの「Siri」をはじめとする音声認識が、最近とても使いやすくなっていることに気づいているだろうか。ほんの数年前まで、音声認識は間違いが多くて使い物にならないと思っていたのではないだろうか。成長期の少年の背丈がみるみる伸びていくような音声認識技術の進歩は、IoTとAIが結びつくことによって生まれる大きな可能性を示唆している。

何もせずに待っているだけでは花も実もならない。リスクはリスクとして意識しながらも、種をまき、水や肥料をやり続けること。それが今すべきことだ。

2. 「ピボットで環境変化に適応する」

機械が取って代わるのは個人の「仕事」だけではない。自動車が馬車を淘汰したように、これから、IoTは様々な産業や業界を駆逐して淘汰していくことになるだろう。

ただし、悲観的になる必要はない。IoTの進化がもたらすであろうリスクは、かなり正確に先を読むことができるからだ。

生き残るためには、具体的に何をすればいいのだろうか。まず有効なアプローチとして浮かび上がるのが、最近マネジメントの世界でもトレンドワードになっている「ピボット」だ。「回転軸」という意味の単語で、マネジメント用語としては「事業の転換」というニュアンスで使われる。

コンピュータ業界の巨人であるIBMは、もともと自動織機などに使うパンチカード(厚紙に穴をあけてデータを記録したもの)を作っていた。

日本を代表する重電機メーカーの一つである富士電機から電話機をきっかけにした通信機器部門である富士通が生まれ、産業用ロボットの世界的メーカーに成長したファナックが生まれた。

生き物が環境に適応して進化するように、企業や個人の仕事もまた、ピボットしながら進化を遂げていく必要があるのは、いつの時代も同じだ。ただし IoT 時代においては、そのスピードと転換の大胆さが、これまでも増して求められるようになる。

3. 「オープンイノベーションへのチャレンジ」

オープンイノベーションとは、一つの会社や組織だけでなく、外部の英知を集めてイノベーションを創出する方法だ。

オープンイノベーションには「他社の侵入を許す」という側面がある。ビジネスの観点から IoT を考えると、イノベーションに参加する企業や組織などの主体は多い方が連携による効果は期待できるが、システムに入れる人が増えるほどセキュリティのリスクは高くなる。利益をどう配分するかといった点も問題だろう。

研究機関などによるオープンイノベーションが積極的に推進されながらも、日本でなかなか本格的なビジネスとして結実しないのは、こうしたネガティブな側面が警戒されているからかもしれない。注意したいのは、オープンイノベーションのポイントは「門を開け放つ」ことではないという点だ。例えば、道路はオープンだが、誰がどのように自動車を走らせてもいいわけではない。運転免許を持った人が、ナンバープレートのついた自動車を制限速度などの交通ルールを守って運転する必要がある。誰かが、好き勝手に作った違法な車を、時速 300 キロで走らせると、道路の安全は崩壊してしまう。オープンイノベーションも同じだ。

入場を許すルールを作り、その匙加減を調節する。あまりにも多様なケースが想定できるので、一言で政界の方向を示すのは難しいが、ビジネスにおけるオープンイノベーションでは、この匙加減こそがパートナーシップの条件ということになるだろう。

「インダストリー 4・0」は、ドイツが産官共同で推進している国家プロジェクトだ。簡単に説明すると、IoT を基盤に自律的に動作するインテリジェントな生産システムを確立し、スマートファクトリーを実現しようとするもので「第四次産業革命」とも呼ばれるほどの大きな変化をもたらすことが期待されている。製造業など産業のスマート化は、アメリカの GE など積極的に取り組んでおり、ドイツとしのぎを削っているのが現状だ。しかし、ふと足元を見れば、インダストリー 4・0 が標榜する「工場をつなぐ」という考え方やシステムでは、実は日本も世界の最先端を走っている。重機業界のコマツのほか、いくつものメーカーがすでにスマートファクトリーと呼べるシステムを社内実現している。

ただし、少し残念なのが、その最先端のシステムが 1 つの企業の中に「閉じて」いて、その閉鎖性が日本初のイノベーションの特徴になってしまっていることだ。優れ

た日本の企業や担当者が、オープンイノベーションを巧みに取り入れる発想とアイデアを手に入れて、絶妙の「匙加減」を見出せば、第四次産業革命で世界をリードしていく存在になれるはずだ。多彩な企業やアイデアなどの提供者とパートナーシップを組んだオープンイノベーションを是非実現すべきだ。

感想

この著書を読んで、別の著書でも読んで知ってはいたが、日本はかつての電器産業の成功を引き摺っていると改めて認識した。これまで読んできたいくつかの著書にも書かれていたが、昔と今とでは、すでに何もかもが違う。良いものを作っているだけでは、売れなくなってきているのだ。

また、この著書の中で「日本はソフトウェアを軽視している」という部分を読んでなるほどと思った。これまで品質の高いモノ(例えば、パソコンや携帯電話)を作っても、一時は世界を獲れる。しかし、一時だけだ。気づいたらトップの座を明け渡している。

その原因がソフトウェアの軽視だ。確かに昔では音楽プレーヤーの「再生」や「巻き戻し」は物理的なスイッチを押すことによって行われた。しかし、現在のものには、基本的になく、代わりにソフトウェアが代替りの機能を果たしている。今は、「ハードウェアがソフトウェアを使っている」のではなく、「ソフトウェアがハードウェアを動かしている」のだ。ソフトウェアに対する姿勢を変えることができれば、世界を包み込むIoT化の波が日本の大きなチャンスになるだろうと著書で述べられていた。

このように、この先の大きな波に乗っていくにはどうすればいいか、また、現在盛んにおこなわれている自動運転の開発、これがこの先どうなっていくのか、どうすれば日本が世界をリードできるのか、非常に興味深い内容だった。

新事業でビジネスを考える時、これを作ることで使用者にどんなメリットがあるかだけではいけない。

先月のイノベーションエンジンで戸田さんと話し、その時に戸田さんが言っていた「新しいことを考えるときは、まず世界をどうしたいから入り、そのために必要な技術やモノを何かに落とし込んでいく行くプロセスの重要性」について、この著書を読んだことでよりイメージしやすくなった。

この先新事業を考えるときは、今回得た大きな世界でものを考えていきたいと思う。